

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 楊 潔

瑜伽行派は、中観派とならぶ大乘仏教の二大学派の一つであり、唯識説を唱えたことで知られている。『瑜伽師地論』(以下、『瑜伽論』)はこの学派の最初期の典籍の一つであり、4世紀頃には成立していたと考えられている。『瑜伽論』は心の状態を詳細に分類しているが、本論文では、すべての心に遍在する五つの心作用である「五遍行」という概念に着目し、その背景と思想上の意義を考察している。五遍行とは、作意・触・受・想・思の五つを指す。先行研究で指摘されてきたように、『瑜伽論』に見られる心の状態の分析は、時代的に先行していたとされる説一切有部の教理と多くの点で共通しており、五遍行も、説一切有部の「十大地法」という概念の一部と対応していることが知られている。従来の研究では、十大地法を構成する十の心作用から五つを取り出し、別立てしたものが五遍行であると解釈されてきた。本論文は五遍行に関する『瑜伽論』の記述を精査し、説一切有部の思想との相違点を指摘しつつ、ブッダの直説とされるニカーヤにその淵源を辿ることができることを明らかにしている。

また、瑜伽行派の思想の中核をなす概念であるアーラヤ識と五遍行の関係について、この分野の権威とされる先行研究において、すべての心作用を停止する瞑想である滅尽定において五遍行は存在しうるのか、という疑問が提示されていた。これに対して本論文は、瞑想という観点ではなく、生命の発生という観点から見た場合、受精直後の胚(カララ)にあるアーラヤ識が心作用を伴うことは、『瑜伽論』においては必ずしも否定されていないことを、文献を精査することによって明らかにしている。以上は定説に対して新たな知見を示すものであり、斯学に対する本論文の貢献として高く評価できる。

さらにまた、こうした結論を導くために、本論文では『瑜伽論』の五遍行に関連する部分のサンスクリット語テキストを写本に基づいて再校訂し、さらに漢訳とチベット語訳を複数の版本に基づいて校訂したうえで、それぞれに精緻な和訳を施している。訳文や解釈に改善の余地はあるが、まとまった訳注研究の少ない当該分野において、大きな功績と言える。

ただし、以下の点は再考の余地がある。本論文は五遍行という概念に着目し、個々の項目ごとに論じているため、それが論述の構成を分断することになり、本来論じるべき輪廻説や縁起説のような重要なテーマが陰に隠れてしまった感は否めない。また「説一切有部」や「ニカーヤ」の思想を比較対象として論じているが、最新の研究成果からすると、これらはより繊細な扱いが要求される。このような課題はあるものの、上に挙げた本論文の画期的な意義を損なうものでない。

以上の審査結果をもって、本審査委員会は、本論文を博士(甲)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。